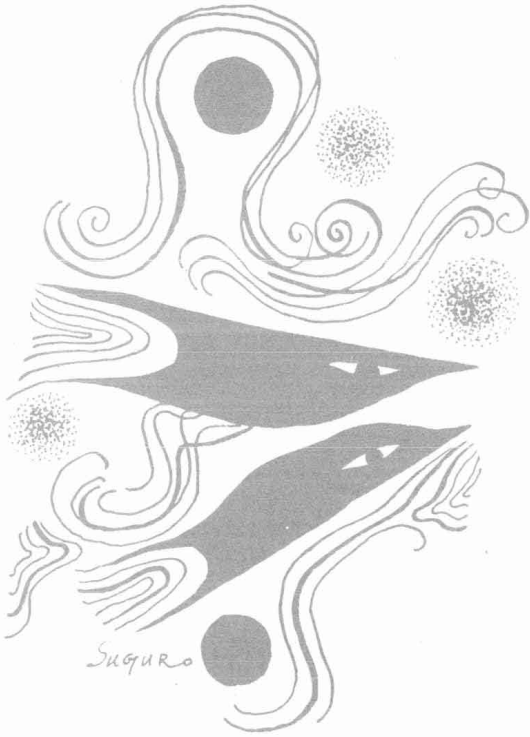
未踏の時代

福島正実

早川書房

未踏の時代

福島正実



早川書房

福島正実(ふくしままさみ) ＳＦ作家・評論家・翻訳家。
1929年生。明治大学文学部卒。1976年4月没。
主著者『ロマンチスト』『分茶離迦』『月に生きる』『ＳＦの夜』　主訳書『夏への扉』『幼年期の終り』（以上早川書房刊）他多数あり

未踏の時代

1977年4月30日　初版第1刷発行

著　者　福島正実
発行者　早川　清
発行所　株式会社 早川書房
東京都千代田区神田多町2-2
郵便番号101　振替　東京・6-47799
電話　東京(03)254-1551(代)
印　刷　中央精版印刷株式会社
製　本　中央精版印刷株式会社
定　価　1600円

検印廃止

未踏の時代

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

～'60

1

SF草分け時代の回顧は、もうそろそろ止めなければならない。

この数年間に、すでに何回か、さまざまな機会に、ぼくはこの種の記事を書き、また喋ってきた。だが、そのたびにぼくは、苦い思いを胸にかみしめた。

はじめのうちは、SFの編集の仕事を退いたばかりだからだと思っていた。思い出として懐しむには、あまりにも生々しすぎるからだろうと考えていた。だが、やがて、必ずしもそうではないことに気づきはじめた。その苦さは、いつまで経っても同じように苦く、生々しさは、いつになっても変らなかった。事実、今でも——SFMの創刊以来十五年、ぼくがSFM編集長の座をおりてからでもすでに六年の歳月が経ったにもかかわらず、SF草分け時代の思い出はぼくにとって、決して甘い過去の物語とはなっていない。

それは、ついそこに、手をのばせばとどくところに、今もある。その時の悔恨は、今の悔恨であり、そのときの焦燥は、今の焦燥であり、その時の怒りは、今の怒りである。

もちろん、今となってはじめて気がつく過ちもあり、それについての数多くの自省もある。不足だった努力への、ひとりよがりだった判断への自己批判もある。けれども、それらが、苦い過去を、少しでも甘くすることはない。若げの過ちとして許し、あるいは、遠く、過ぎ去った事柄として認めることはできないのである。

草分け時代に始まって、数年前に一応のピリオドを打った、SFのために費やされたその時期は、ぼくの人生の、かけがえのない部分が、最もみじめに蚕食された時期だった。それはぼくにとって、救い難い試行錯誤の時期——誤認と挫折と失敗との時期でこそあれ、なんらの栄光の時ではなかった。

そんな意識が拭い取りがたくぼくの内部にある以上、その時期について語るぼくの語り口が苦く——その結果、読者に不快な後味を経験させる惧れのあることを、最初に断っておきたい。そうだ。ぼくが、これを最後に述懐めいたこの種の文章の筆を折るべく、いまこれを書くのは、SFのパイオニア、SFMの初代編集長の栄光という類いの虚名を、返上したいからにほかならない。

それにしても……こうして、この種の記事の筆を取ろうとするとき、ぼくは、ぼくがSFMの編集業務を去るほんの三、四ヵ月前、とつぜん思いたって、脱れるように東南アジアへ旅立った、六年余前のあの日のことを、必ず思い起こすのは、たんに、ぼくの悪癖——度し難い感傷主義のなせるわざなのだろうか。それとも、それが、その後にぼくを襲ったあのどうにもならない空しさの、始まりだったからだろうか。

九周年記念号（一九六九年二月号）をようやく出し了え、押し詰る年末にむかって山積する公私の仕事のスケジュールを、無理矢理押し切りほぼ片づけて、ひとり、無目的な東南アジアへの旅に出た

のは、四十五年の十二月はじめだった――一週間近く、徹夜に近い仕事をつづけ、睡眠不足と疲労とにふらふらになりながら、とにかくジェット機に乗り込み、南シナ海を越え香港経由で着いたバンコック――ホテルに着くと、トランクもあけず、服も脱がず、そのままカヴァーもとっていないベッドに倒れるように転がって――つぎの瞬間には、泥のように睡りこんでいた。ふと目覚めると、もう夕闇のよどむ部屋の中に、ブラインドの隙間越しに、異国の夕陽の、鮮やかなオレンジ色の光の箭が射し込んでいた――それを、身動きもならず、ただじっと横たわったまま見つめていたときに感じた、あの疲労と、空しさと、白々しさ。

そのときぼくは、はじめて、心の底から、自分自身の仕事と、編集の仕事との両刀使いは、もうあまり長いこと続けてはいけない、と感じたのだ。このまま続けていては、心身ともにへばってしまうという危機感を、ひしひしと感じたのだ。いや、それ以上に、自分が始めてしまったSFというものに、自分が抱いていた過剰なほどの責任感が、阿呆らしく、馬鹿くさく見えてきた――少なくとも、そのために、これ以上体力を消耗し神経をすり減らすのは、そろそろ願い下げにすべきだと思った。ぼくは、SFMよりも人生が大事と、何度も独りごちたのを、覚えている。

2

SFMの創刊は一九六〇年二月号である。これは、実際には、その前年、一九五九年十二月という

ことになる。そして、SFMが企画されたのは、その年の春頃だった。

その頃の早川書房編集部には、都筑道夫、小泉太郎（のちの生島治郎）それに常盤新平などがいた。都筑道夫は、いうまでもなく、一九五六年に創刊され、すでに三年近くになっていたEQMM（エラリイ・クイーンズ・ミステリ・マガジン）の編集長であった。この頃の編集会議に、SF雑誌の出版を提案したのは、都筑道夫である。

ぼくは、この企画には、必ずしも賛成ではなかった。都筑道夫は、当時かなり疑問視されていたEQMM日本語版を成功させて自信を持っていたけれども、ぼくは、ぼくの考えるサイエンス・フィクションが、世の中に受け入れられる素地は、まだ熟していないと考えて、単行本のシリーズならばよいが、雑誌の形式ではまだ無理だという意見を持っていたからである。

早川書房は、それよりもさらに二年前――一九五七年末から、〈ハヤカワ・ファンタジイ・シリーズ〉と銘うつ海外SFのシリーズを刊行していた。『盗まれた街』（フィニイ）『ドノヴァンの脳髄』（シオドマク）『火星人ゴーホーム』（ブラウン）『吸血鬼』（マティスン）『宇宙の眼』（ディック）『鋼鉄都市』（アシモフ）『呪われた村』（ウインダム）などが、その頃までに出た主なSFである。

このシリーズの企画編集に当ったのが都筑とぼくだが、これについて、さらにつぎのような経緯を書いておかなければならない。

海外SFのシリーズは、もちろん、これが初めてではなかった。最も早いものとしては、アメリカのSF雑誌〈アメージング・ストーリーズ〉の日本語版のかたちをとった誠文堂新光社のマガジン・

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

バージョンが一九五〇年に出版されている。これが、その年の内に廃刊になってのち、一九六〇年には、室町書房が〈世界空想科学小説全集〉を企画した。都筑道夫は、このときすでに、この企画スタッフとして参加している。これは『火星の砂』（クラーク）『宇宙気流』（アシモフ）の二冊のみで潰えたが、同じ年ぼくは、当時タトル商会で翻訳権を担当していた宮田昇（内田庶）とともに、わが国で最初のジュヴナイルSFシリーズを企画し、これをその年の暮、石泉社銀河書房から出版していた。R・F・ジョーンズ、A・C・クラーク、P・アンダースン、L・デル・レイ、R・マーステン、A・E・ナースなど、錚々たる一線作家のジュヴナイル作品だった。このシリーズは、石泉社の極端な非力にもかかわらずある程度の成功を収めその後一年半の間に二十数冊を刊行して、その直後にはじまる、講談社はじめ多くの出版社の児童むけSF出版のきっかけをつくった。

もちろん、ジュヴナイルものではあるが、これはわが国のその後のSF出版に与えた影響は、決して少なくないとぼくは思っている。それらは、その当時、直接の対象であるロウティーンを頂点とする年少読者のみならず、SFに飢えていた一般SFファンの渇を、不満足ながらも癒すことに役立っていたのだし、さらにいうならば、ぼくを含むSF指向の編集者、翻訳者たちの、SFへの夢を消すことなく保ちつづけさせることにも役立っていた。いいかえれば、この企画は、その当時のわが国のジャーナリズムおよび読者層の中に潜在していた、SF出版へ

〈SFマガジン〉創刊号

の夢を培い、やがて訪れるその時を期待する心理的基盤をつくっていた。その意味で、ぼくは、この当時の一般むけSFと、ジュヴナイルSFとを、切り離して考えることはできないのである。

じっさい、もし大人むけSFだけに希望をつないでいたら、一九六〇年代に、SFシリーズやSFMの出版に、われわれが漕ぎつけることができたかどうかは、すこぶる疑問である。

その当時のジャーナリズム一般の空気は、SFに対して、全く否定的だった。SFを読み、あるいは語ることは、アブノーマルなものへの関心を自白するようなものだった。変りもの扱いにされることを覚悟しなければならなかったのだ。そんな体験からも、ぼくは、日本におけるSF出版の可能性に対して、かなりの程度に悲観的だった。現実にしか目を向けることができず、未来や空想は、絵空事としてひとしなみに軽蔑してかかることしか知らない人々が、あまりにも多すぎた。そうした人々に、SFの効能をいかに説いても、所詮は馬の耳に念仏としか思えなかった。そのとき、唯一の希望を与えてくれたのが、ロウティーン以下の年少読者たちだった。彼らにとっては、空想が生活の貴重な一部であり、未来は、彼らの現実の中に組み込まれるべき時間の一部だった。そうした彼らには、SFは、きわめて魅力的な世界を提供できるはずだ。

ぼくは、石泉社のジュヴナイルSFの企画を通じて、英米およびソ連には、大人むきのSFと同時に、ジュヴナイルSFがかなりの盛況を呈していることを知っていたし、そうした読書を通じて、嘗て知った、海野十三や蘭郁二郎らによって培われた、SFへの情熱の昂りをも感じていた——そうした気持があったからこそ、SF出版への夢を接続することができたといって過言ではないのだ。

だが、SF出版は、さらに、あと何回かの迂余曲折を経なければならなかった。

一九五六年には、元々社は、佐藤享一を中心とする企画チームによって、その〈最新科学小説全集〉を出版しはじめた。『人形つかい』（ハインライン）『発狂した宇宙』（ブラウン）『火星年代記』（ブラッドベリ）『人間の手がまだ触れない』（シェクリイ）など、戦後のアメリカ、イギリスの最新のSFが、ここに初めて、本格的に紹介されはじめたのである。このシリーズは、最初非常な反響をよび、ジャーナリズムも、かなりの反応を示した。

だが元々社は、翌五七年、二十冊のSFを残してもろくも倒産し、殆ど同時に石泉社が倒産した。そして、その他の社のSF企画類（おもにジュヴナイル）も不調という有様となり、ために出版界には、「SFに手を出す出版社は潰れる」というジンクスさえ囁かれるようになった。

ぼくは、この間の事情を、以前あるところでつぎのように書いている。

――しかし、これについては、ぼくなりの見解もありました。たとえば〈アメージング・ストーリーズ〉の場合、誠文堂新光社は、新らしい小説ジャンルとしてのSFをでなく、むしろ従来の、ロウレベルな怪奇・猟奇読物路線の新手としてSFを売ろうとした結果失敗したのです。それは、戦後わずかに五年、まだ荒廃の跡の残っていた昭和二十五年では当然のことでした。その当時の日本には、新らしい小説ジャンルを積極的に探索する余裕などなかったのです。

また、元々社の〈最新科学小説全集〉が、最初はかなりの反響を呼び、慧眼の文化人たちからも支持されながら、なぜ挫折したかといえば、もちろんそれは、この当時の小資本の出版社が経営的に脆弱であったということもさることながら、その反響そのもの、支持そのものが、まだま

だ本物でなかったから、ということがいえるでしょう。

じっさい、この頃、SFの〈流行〉を、一つの社会的現象として捉えようとした週刊誌などの紙面で、取材に応じたいわゆる文化人たちは、SFを荒唐無稽な大衆小説ときめつけ、阿諛的な発言をするか、あるいは「未来よりも現実をどうしてくれる」式の非難めいた口調で退けるか、あるいは、折からのいわゆる〈宇宙時代の開幕〉を先取りして——世界最初の人工衛星スプートニク1号が打上げられたのは、じつにこの年でした——未来の花形といった、軽佻浮薄ないいかたしかしていませんでした。そして、SFファンの側でも、SFの受け入れ態勢がなかなか出来ないのに焦だつあまり「スキャンダルでもなんでも、目立てばそれだけSFの宣伝になる」といった類いの乱暴な考え方が通用していた時代だったのです。

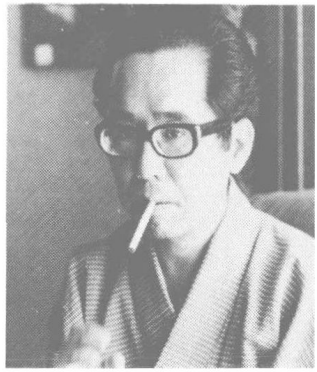
これに加えて、もう一つ、挫折の原因として見逃せないのは、元々社版のSFの翻訳の、あまりのお粗末さです。じっさい、ある程度以上の評判になり、二十冊も連続刊行された海外小説シリーズで、およそこれほどの誤訳悪訳珍訳ぞろいの欠陥翻訳を並べたものは、他に類をみなかったといっていい。

当時巷間に伝えられたところによると、元々社では、SFは科学的な小説だからというので、理工科系の若手学者を翻訳陣に入れ、難解な科学・技術的テクニカル・タームにアタックさせているという、一見まことしやかな噂が流れましたが、もちろん、たんなる嘘だったのでしょう。それにしては、あまりに非科学的な誤りや、初歩的な語学力の不足が目につきすぎました。しかし、こうした噂——科学の小説だから、科学者がいちばん翻訳にむいているだろうという杜撰な

考え方がけっこう通用したという状況そのものの中に、問題はありました。それは、新らしいジャンルとしてのSFに対する認識の不足を、如実にあらわしていたのです。

それでこれが、現実には、箸にも棒にもかからない低劣な翻訳書を世に送りこむ結果となりました。SFについて、始ど何の知識もなく――いや、はじめてSFにお目にかかったような、何でも屋の二流翻訳家が、ろくに調べもせずSFをいじくりまわし、一知半解のまま翻訳したのだからたまったものではない。SF用語は無造作に一般用語に置き換えられ（たとえばある本ではray-gunがピストルとair carが車と訳されたため「ピストルで足もとをなぎはら」ったり「車が市の上空を旋回」したりすることになった）天文学、物理学、生物学用語には通りいっぺんの訳語が当てがわれ、その結果、意味も通りにくい文章ができ上るというていたらくとなった。

これが、SFが新らしく獲得できるはずだった読者たちを、SFからつきはなし、そっぽをむかせたばかりではなく、より高度な読者には、SFに対する頑固な蔑視の習慣を植えつけてしまった――このシリーズの失敗は、こうも見ることができるのです」


都筑道夫氏

さて、こうした元々社や、他のジュヴナイル出版社のSF企画の失敗は、ぼくたち、SF出版を願う者たちの胸に、さまざまな思いを抱かせた。一方には、諸般の状況から推して、SF出版がまだまだ困難だという気持が根づよくなる半面、

一方では、従来のやり方の欠陥を除去しさえすれば、なんとかやっていけるのではないかという考えも頭をもたげてきた。そして、何よりも、このままにしておいたのでは、心ない連中にSFの可能性を食い荒され、ついには、SF出版が本当に不可能になってしまうという危機感が、刻一刻とつよくぼくたちに迫ってきたのである。

一九五七年、元々社のSFシリーズが蹉跌した直後に、都筑道夫とぼくとは、何とかして早川書房でそれにかわるシリーズを表現させようと考えた。しかし早川書房の編集会議は、結局それを否決した。思いあまったぼくは、すでにジュヴナイルSFシリーズを刊行していた講談社にその話を持ちかけさえした——しかし、元々社の失敗を目のあたりに見た出版界にはとうていSFを出版対象とする気配は見られなかった。

だが、この年の秋、二度めに早川書房に出した企画が思いもかけず通ることになった。これが、早川書房の〈ハヤカワ・ファンタジイ〉の誕生の経緯である。

都筑道夫とぼくとは、このシリーズを出すにあたって、過去の経験にかんがみ、つぎの三点に特に留意した。第一には、いたずらな偏見を招くおそれのあるサイエンス・フィクションという言葉を使うことを避け、すでに日本語の中に定着しているファンタジーという言葉を用いること。第二には、最初からプローパーSFを選ばず、むしろ、サスペンス・スリラーとしても読むことのできる作品——SFファンのみならず一般読者——とくにミステリー読者にも受け入れられやすい作品を、主として取り上げること。そして第三には、翻訳を、ミステリー以上に読み易く、しかもSF独得の雰囲気を損なわない正確なものにすること。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com